

2020年度日本特別ニーズ教育学会奨励賞を受賞して

能田昂（尚絅学院大学）

この度は「2020年度日本特別ニーズ教育学会奨励賞」を賜りまして、誠にありがとうございます。審査をして頂きました選考委員の先生方、日本特別ニーズ教育学会の皆様へ深く感謝申し上げます。

さて、2015年に国際基督教大学教養学部より東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程特別支援教育専攻に進学しました。指導教員の高橋智教授（現・日本大学文理学部教授、東京学芸大学名誉教授）より、歴史的視座からも子どもの生命や発達の保障について捉えていくことの重要性をご指導頂き、修士論文「近代日本における災害救済と障害児教育保護成立の歴史的位相—濃尾震災を中心に—」に取り組みました。1891（明治24）年の濃尾震災という、近代国民国家の成立期に起きた大災害のもとでの孤児・障害児者の救済保護の検討を通して、災害と救済・復興が障害児教育保護システムの成立に与えた影響の如何について考察しました。

2017年に進学した東京学芸大学大学院連合学校教育研究科博士課程発達支援講座において、引き続き高橋教授のご指導のもと、博士（教育学）学位論文「近代日本における災害救済と障害・疾病等を有する子どもの特別教育史研究—濃尾震災（1891年）を中心として—」に取り組み、「子どもと災害被災の特別教育史」分野の開拓に向けて、災害における子どもの「生活と発達の困難」の実態と支援のあり方を歴史的に検証することを目的としました。災害被災に伴う各種の困難について、特に子どもの視点から実態を明らかにすることに主眼を置きました。

今回の受賞論文（能田・高橋「1891（明治24）年濃尾震災と石井十次の震災孤児院・岡山孤児院における孤児救済・教育保護の課題」）もこの取り組みの一環となります。民間篤志家・石井十次の「震災孤児院」に収容された21名の孤児ら一人一人が災害時にどのような状況にあったのか、特に生命・生存の危機や家族との愛情・関係性の喪失・切断の実態等について検討を行いました。子どもたちには周囲の環境すべてが破壊される壮絶な災害を経験したことによる多種多様な傷つきがあり、とくに目の前で家族が圧死するのを目撃した子どもには現代における「フラッシュバック」とも考えられる様子も見られ、「災害によるトラウマ体験」の歴史的実態の一つと言えるものでした。

本研究は、高橋研究室において長年取り組まれている「特別教育の歴史を子ども・当事者の視点で読み解く」という視点に基づくものです。今後も引き続き、歴史のなかの子どもたち一人ひとりに、丁寧に向き合って参りたいと思います。

現在、パンデミックを含めた各種の災害・ライフハザードが深刻化して、子ども・社会的弱者の生存を脅かしています。危機において子ども・当事者の視点から課題の本質を捉えていくことの大切さを感じるとともに、力量不足を痛感しております。今後は新たに疾

病・公衆衛生の視点も織り交ぜながら、研究を行って参りたいと考えております。

最後になりましたが長年にわたりご指導をいただいた先生方に、厚くお礼申し上げます。今後ともご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。